

# マルクスへ帰れ

日間(H25)  
13 9.15  
毎新

張一兵著 (情況出版・6825円)

中国マルクス主義の現状がわかる好著だ。30年くらい前まで、日本ではアカデミズムと論壇におけるマルクス主義の影響が強かった。1930年代に展開された講座派(共産党系)と労農派(非共産党系)のマルクス主義者による日本資本主義論争が知識人の「思考の類型」を作り出した。講座派が日本の社会構造の特殊性を強調するのに対して、労農派は普遍主義的な世界システム論を展開した。この類型は、現在も少し形を変えて生き残っている。日本型経営論やPPP反対論は講座派的で、グローバルイニシアティブを主張する人は労農派的な発想を無意識のうちにしている。1960年代から70年代にかけて、アカデミズムと左翼運動(とりわけ新左翼)に強い影響を与えたのは、宇野弘蔵(1897~1977、元東大社会科学研究所教授)と廣松渉(1933~94、元東大教養学部教授)だ。宇野は、「原理論、

段階論、現状分析からなる三段階論」を唱え、『資本論』をイデオロギーから解放された「科学としての経済学」に再編することを試みた。宇野が自らの活動をアカデミズムに限定したのに対し、廣松は実践的で、全共闘運動の理論家としても活躍し

## 経済学から哲学への“火花”を読み解く

た。人間の「本来のあり方」から資本主義が乖離していることを批判する疎外論ではなく、いかなる「本来のあり方」も認めず、すべての存在は相互関係から成り立っているという物象化論がマルクスが切り開いた画期的な世界観の地平であると主張した。廣松の方法は仏教の縁起観と親和的だ。

第三者的に見た場合、宇野は労農派、廣松は講座派の伝統を継承している。いずれにせよ宇野経済学、廣松哲学は、欧米やロシアのマルクス

研究を遙かに超える高度な知的営為だった。残念ながら、現在の論壇でこの二人を批判的に継承しているのは、宇野経済学については柄谷行人、廣松哲学については宮台真司くらいである。

張一兵(本名・張異賓、1956~)は、南京大学副学長であるとともに南京大学共産党委員会副書記をつとめるアカデミズムにおける共産党幹部だ。しかし、張一兵は共産党の方針を適宜、マルクスやレーニンの言葉で理論的に正当化するという類の旧ソ連、旧東独で行われてい

になる。第四は、旧ソ連・東欧社会主義諸国で展開された公認学説で、マルクス主義が漸進的に発達するという点に特徴があるので、張一兵は、「進化説」と名づける。

そして最後の第五に、南京大学哲学科の孫伯鏢教授によって展開された独自モデルをあげる。△このモデルは、マルクス・エンゲルスの思想の2次・転換論と『1844年手稿』の中の2つの論理の相克という観点とからなっている▽ということだが、評者には第三モデルの亜種のように見える。張一兵は、自らもこのモデルを支持することを繰り返し強調するが、この点は、孫伯鏢との師弟関係を強調する学界政治的記述と見るべきであろう。

本書が優れているのは、マルクスが『資本論』の思想に至る過程で吸収したドイツのヘーゲル左派の思想、フランス革命の思想、イギリスの経済思想を、張一兵が丹念に検討していることだ。特にマルクスのメモ類を注意深く読んでいる。例えば、1845年4月にマルクスが書いたメ

モハエゴイストの人間との対立における神的エゴイスト(Göttlicher Egoist)。/古代国家制度にかんする革命期の錯覚。/「概念」と「実体」(Substanz)。/革命=近代国家の成立史(Erstenhanges-Beschichte)▽から△このテキストは、マルクスの当時の思考実験中に発火した重要な思想の火花の記録だからである。この小さな火花は、彼が具体的な経済と歴史の研究中に突然発見した重要な哲学上の規定群、すなわち歴史性、現実性、具体性という規定群だったのである▽と読み解いたのは見事だ。評者もこの見解を支持する。

急速に資本主義的経済発展を遂げている中国にはさまざまな社会矛盾が生じている。その社会矛盾を「本来のあり方」を取り戻すとか、ヒューマンイズムによって克服するとかいうのではなく、資本主義が多重に顛倒され、魔法にかけられた、仮象が本質を覆い隠す偽の世界▽との認識を持つに至った共産主義者の力で資本主義を転換する方向性を、張一兵は本書で強く示唆している。廣松渉の夢は、中国で継承されているようだ。翻訳も読みやすい。

(中野英夫訳)